

FLORA KANAGAWA

Jun. 20. 1995 No. 40

神奈川県植物誌調査会ニュース第40号

〒250 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 内線420・振替 00230-5-10195



サカネラン。1995年6月4日、西丹沢の権現岳の標高約1000mのブナ林内で見つけました。詳しくは次号で。(高橋秀男氏撮影)。

村上 司郎：金沢区長浜，汽水池周辺の植物	428
田中 一雄：箱根外輪山産の北限新産地シダ植物について	429
田中 徳久：シナダレスズメガヤに御用心	431
奥津 均：ヌマツルギクの県内発見の事情	432
藤野 知弘：アキザキヤツシロランとの出会い	432
事務局：神奈川県植物誌調査会 1995 年度総会報告	433

金沢区長浜、汽水池周辺の植物

(村上司郎)

平成4年、横浜市によって金沢区長浜公園の造成が終わり、一般に公開された。面積は約15万m²もあるのだが、高速道路を挟んで北側は運動施設のある広場、南側は野鳥観察園と区切られている。

この南側の観察園には3haほどの汽水池があり、ここへ野鳥が寄ってくるので、これを観察させようということである。ただし池の周囲は金網で厳しくガードされており、数ヶ所野鳥観察舎から覗くということで我慢せねばならぬ。

この汽水池は明治の半ば、長浜検疫所が開設された折に造られた船溜りの跡とかで、水路で海と結ばれ、潮の干満により水位が変化するようになっている。

一般の人はこの池への立ち入りができないが、私は市の緑政局のご好意で、春と秋4回(4月18日、5月18日、9月10日、9月26日)池の周辺を歩き、植物を観察することを得た。その結果、合計200種をこえる維管束植物をリストアップすることができた。初夏から夏にかけて調査をすれば、一層種数は増えるものと思われるが、次回の楽しみとしておきたい。以下、少しく気付いたことを記す。

1. カヤツリグサのなかまが目立つ

記録されたカヤツリグサ科植物は12種。なかでも汽水池の北側にある小さな淡水池の周りのヌマガヤツリの群落は圧巻である。私はヌマガヤツリの大群落を見たことがなかったのも、もしかしたらメリケンガヤツリの群落かと思ったが、ヌマガヤツリばかりであった。

イガガヤツリも市内では珍しい。イガガヤツリは海沿いの湿地に多いのだが、これほど多いとは、と思う。エゾウキヤガラ、フトイ、サンカクイの小群落もあり市内では見かけることの少ない景観ゆえ保護したいところである。

また、小規模ながらマコモ群落がみられる

のも嬉しい。

2. やはり、帰化植物が多い

記録された植物を眺めてみると、やはり帰化植物が多い。ざっと計算してみると、帰化率は27%くらいになる。

珍品はマメ科のアレチヌスビトハギであろう。神奈川県植物誌1988によれば、湘南地域でかなり目につくとのことだが、それにしてもどこにでもあるという代物ではない。私も初めは種名がわからず、持ち帰って調べてやっと判明した。

また、アカザ科のウラジロアカザ、ホコガタアカザも市内では珍しい部類であろう。池の南側だけだが、個体数は少ない。イネ科のオヒゲシバ、ナデシコ科のウシオハナツメクサなども見つかり、これも市内では珍種ではないか。

3. 海岸植物が見られるのも嬉しい

横浜市は比較的長い海岸線をもつにも拘らず、港湾施設や工場群、商業地などの人工物に占拠され、海岸植物の生育する余地はほとんどない。然るにこの池の周辺には、わずかずつだが海岸線の植物が残っている。上記のアカザ類もそうだが、イガガヤツリ、イソヤマテンツキ、コウボウシバ、シオクグ、タイトゴメ、ハマヒルガオ、ウラギクハチジョウナなど、これである。いまでは、市内の海岸線でほとんどお目にかかれぬ植物ばかりである。

フェンスで池の周囲への立ち入りができない現在の状態は、これらの植物群が生き残る可能性を秘めていて喜ばしい。願わくばあまり手入れをしないことを望む。

○記録された植物

トクサ、ガマ、アズマネザサ、(オカメザサ)、マコモ、オオウシノケグサ、オニウシノケグサ、コバンソウ、アシボソ、コブナグサ、オギ、ハチジョウススキ、ススキ、チガヤ、キンエノコロ、エノコログサ、アキノエノコログサ、ヌカキビ、オオクサキビ、シマスズメノヒエ、メヒシバ、アキメヒシバ、タイヌビエ、イヌビエク

サヨシ、カラスムギ、ギョウギシバ、オヒゲシバ、オヒシバ、コスズメガヤ、ヨシ、カモジグサ、メリケンカルカヤ、トダシバ、カゼクサ、ナルコビエ、コヌカグサ、アブラススキ、スズメノチャヒキイヌムギ、カモジグサ、スズメノカタビラ、スズメノテッポウ、シナダレスズメガヤ、ミゾイチゴツナギ、オオイチゴツナギ、ナギナタガヤ、ヒエガエリ、イガガヤツリ、アゼガヤツリ、ハマスゲ、ヌマガヤツリ、カヤツリグサ、ヤマイ、イソヤマテンツキ、エゾウキヤガラ、サンカクイ、フトイ、コウボウシバ、シオクグ、ヤマユリ、ノカンゾウ、ニワゼキショウ、ツユクサ、クサイ、エノキ、ヤマグワ、ミチヤナギ、ママコノシリヌグイ、オオイヌタデ、イタドリ、ギシギシ、ナガバギシギシ、エゾギシギシ、イヌビユ、ホナガイヌビユ、スベリヒユ、ウシオハナツメクサ、ウシハコベ、ミミナグサ、ノミノフスマ、ツメクサ、シロバナマンテマ、コハコベ、ウラジロアカザ、ケアリタソウ、ホコガタアカザ、アカザ、センニンソウ、ケキツネノボタン、タガラシ、ミツバアケビ、タケニグサ、ムラサキケマン、イヌガラシ、オハツキガラシ、マメグンバイナズナ、タネツケバナ、ナズナ、スカシタゴボウ、オオアラセイトウ、タイトゴメ、コモチマンネングサ、コニシキソウ、オオニシキソウ、トウダイグサ、アカメガシワ、エノキグサ、カワラケツメイ、シロツメクサ、ムラサキツメクサ、ノアズキ、クズ、ツルマメ、ヤブマメ、メドハギ、マルバヤハズソウ、ヤハズソウ、ヌスビトハギ、アレチヌスビトハギ、クスダマツメクサ、コメツブツメクサ、ヤハズエンドウ、ヘビイチゴ、ヤブヘビイチゴ、オキヅムシロ、ノイバラ、テリハノイバラ、ナワシロイチゴ、アメリカフウロ、カタバミ、ムラサキカタバミ、ウスアカカタバミ、ヤブカラシ、ノブドウ、タチツボスミレ、アメリカスミレサイシン、アキグミ、コマツヨイグサ、メマツヨイグサ、ノランジン、ヤブニンジン、オヤブジラミ、ミズキ、ガガイモ、(トウネズミモチ)、コナスビ、ハマヒルガオ、コヒルガオ、

キランソウ、トウバナ、カキドオシ、ホトケノザ、ヒメオドリコソウ、メハジキ、イヌホオズキ、クコ、ナンバンギセル、キツネノマゴ、ヘラオオバコ、オオバコ、ヘクソカズラ、ヤエムグラ、ハナイバナ、ヒレハリソウ、キウリグサ、スイカズラ、ハコネウツギ、ノヂシャ、ホタルブクロ、オオオナモミ、ブタクサ、アメリカセンダングサ、コセンダングサ、タカサブドウ、ハキダメギク、ククイモ、ヨモギ、ハハコグサ、チチコグサモドキ、ウラジロチチコグサ、セイタカアワダチソウ、ヒメムカシヨモギ、ヒメジョオン、ウラギク、ホウキギク、オオホウキギク、オオアレチノギク、アレチノギク、コウゾリナ、ハチジョウナ、ノゲシ、オオジシバリ、ムラサキニガナ、ホソバアキノノゲシ、セイヨウタンポポ、カントウタンポポ、ツワブキ、ヨモギ、ノコンギク、シロヨメナ、ヤブタバコ、オニタビラコ、オオキンケイギク、ハルジオン、キツネアザミ、フキ、ノボロギク、オニノゲシ、チチコグサ

()は栽植品が野生化していると考えられる。

この目録の作成に当たっては、金沢野鳥クラブの方々と横浜植物会員大津任氏にお世話になった。厚く御礼申し上げる。

箱根外輪山産の

北限新産地シダ植物について

(田中一雄)

ハチジョウシダ *Pteris fauriei* Hieron

1991.1.22 小田原市久野。山王川水系の標高120m。20年生のスギとヒノキが混植された、北面のやや乾燥している明るい緩斜面の林床に、全長約70cmでソーラスをつけた葉を8枚出し、1月なのにもう新芽を伸ばしている成株を1株発見した。

1992.12.30 南足柄市塚原、太刀洗川水系の標高350m。スギとヒノキが混植され北に向けた適湿の斜面に、全長30cmの1株を発見した。12月なのに1991.1.22に発見した1株

目と同様に新芽を伸ばしていた。

ハチジョウシダは典型的な暖地性シダで、現在までに知られている分布は、沖縄県、鹿児島県、宮崎県、高知県、和歌山県、東京都の島嶼部等いずれも日本の南端部に片寄っており、北限産地は静岡県伊豆半島南端の下田町である。

通常、生育地は海岸から山麓にかけての陽が当たる崖地や林縁で、特徴として葉質はやや厚い洋質紙～革質で、葉面には艶がある。頂羽片は明確で、最下羽片には外側に長い小羽片を1～3対出す。

現在まで、神奈川県以北での発見報告はないが、箱根外輪山で2株発見されたことでハチジョウシダの自生地が、まだ他にもあることが考えられる。

ニシノコハチジョウシダ

Pteris Kiuschiuensis Hieron

1993.11.3 南足柄市刈野。柄沢水系で標高約250mの北に面し、20年生のスギとヒノキが混植され、表土が深く適湿斜面のやや明るい林床に全長が約70cm、ソーラスをつけた葉4枚出している1株を発見した。

ニシノコハチジョウシダは典型的な暖地性のシダで、現在までに知られている分布は鹿児島県、宮崎県、高知県、徳島県、和歌山県、三重県等で、北限は静岡県伊豆半島の河津町である。おしなべて日本の南端部に片寄って分布し、いずれも暖地の陰湿な林下にやや稀に生育して群生はしない。

特徴として、葉質はやや薄い紙質。羽片は無柄で葉軸から直角に近い角度でつき、細長く平行的で先端に近づくと上方に向かって鎌状に曲がる。頂羽片は明確で、最下羽片の外側に1～2対の小羽片を分岐する。

ルリデライヌワラビ

Athirinum wardii var. *inadae* Tagawa

1994.11.20 南足柄市刈野。柄沢水系の標高

約410m。東に面し40～50年生のスギが植栽され、表土が深く、間伐が行き届き、明るく適質なシダ植物が多く生育している林床の斜面に、3枚の葉を出した全長約35cmのルリデライヌワラビを1株発見した。

特徴としては、母種のヒロハイヌワラビより小型で、広二等辺三角形ではなく長卵形なので、イヌワラビと間違えやすい。母種がやや黄緑色であるのに比べ葉の緑色が濃く、葉質はやや薄い。葉身の下から4～5対目より上は尾状に細く、頂羽片状になる。小羽片は円頭で互いに重なるようにつき、耳片は母種のように発達はしない。小羽片は小羽軸にすべて沿着しており、小羽軸の幅が広く見える。ソーラスは母種と同様に、線形でカギ型は混じらない。葉軸の表面はやや紫紅色を帯びるが、葉柄はワラ色で基部には淡褐色の細かい鱗片が密につく。

判明している分布は、九州、四国、山口県、兵庫県、三重県等で、北限産地は静岡県伊豆半島である。ルリデライヌワラビは母種に比べその産地は極端に少ないが、これは観察者の注目度が低いためと思われる。注意されるにつれて産地は増えていくと考えられる。

オトコシダ

Arachniodes assamica (Kuhn) Ohwi

1992.6.12 南足柄市塚原。大刀洗川水系の標高約420m。間伐を施し適当に光の入る約20年生のスギとヒノキが混植された、人工林の林床の北に面した適湿斜面に、全長約30cmのオトコシダ1株を発見した。それは古葉、新葉とで4枚の葉を出していたが、ソーラスをつけている葉は1枚のみであった。完全に成長した葉は全長120mに達する。

特徴として、カナワラビ類を極単純化した形の1～2回羽状複葉で、表面に艶があり、薄い革質で、濃い緑色をしている。印象としてはオリヅルシダの葉がやや切れ込んだ感じがする。

オトコシダは暖地性のシダで、現在知られている分布は、鹿児島県、宮崎県、熊本県、福岡県、愛媛県、高知県、徳島県、山口県、和歌山県、三重県等、おもに太平洋沿岸である。いずれも、日本の南端部に片寄っている。

その産量は全国的にみても少なく、とくに本州では紀伊半島南端部を除けば、山口県で2点、伊豆半島で2点採集されているだけの極めて稀な状況である。今回、箱根外輪山の発見は、1975年以来17年ぶりに北限産地が更新されたことになる。

コクモウクジャク

Diplazium virescens Kunze

1995.1.21 南足柄市刈野。狩川右岸の標高約260 m。スギとヒノキが混植されて約30年、間伐もされ林内は適当に明るい。北に面した表土の深い適湿な人工林の林床の斜面に、ソーラスをつけた葉をまじえ、全長約80cmの葉を10枚ほど出している一群を発見した。

コクモウクジャクは典型的な暖地性のシダで、このシダの群生している森林は、南国的景観が醸し出される。

現在までの分布は、沖縄県、鹿児島県、宮崎県、熊本県、長崎県、福岡県、高知県、徳島県、和歌山県、三重県、静岡県、東京都の島嶼部で、いずれも各県の南部に片寄って分布しており、北限産地は1990.2.17に日本シダの会々員青木清勝氏によって発見された、神奈川県逗子市の二子山である。

今回の発見は、神奈川県で二番目だが、位置的に逗子市より北なので、北限新産地と言うことができよう。

その特徴は、根茎は長く這い、成葉の全長は約1 mとなり、葉質はやや艶のある薄いなめし革質、葉色は濃い緑色である。葉形は広三角形で羽片は葉軸に対して50度前後の角度を持つ。小羽片の先は尖り、羽片の約1/3より上部は1回羽状で、2回羽状には切れ込

まない。葉柄基部には縁に突起のある黒色の細い鱗片を持ち、コクモウクジャクの名前の由来となっている。

以上、神奈川県が北限新産地になったと思われるシダ植物5種について述べてきたが、これらはいずれも従来伊豆半島が北限で、三浦半島や房総半島に到達できていないとされてきたシダ植物である。

そのほかに、箱根山地はイワヒメワラビの多産や、コバノイシカグマ、キヨスミヒメワラビが普通に見られること、ヒカゲワラビ、オニヒカゲワラビ、シロヤマシダ、タニイヌワラビ、ナガバノイタチシダ等、珍しくないこと、ヌリトラノオ、コハチジョウシダ、ミヤマノコギリシダが見られること等を考察してみるに、現在箱根山地は太平洋岸において、北上しつつある暖地性シダ植物の最前線になっていると考えられるが、このことに関しては現在資料の収集中である。

シナダレスズメガヤに御用心

(田中 徳久)

会員の皆さんはシナダレスズメガヤ *Eragrostis curvula* (Schrad.) Nees というイネ科植物を御存知でしょうか。道路の法面緑化や砂防用に植栽(播種)される南アフリカ原産の植物で、広く野生化しています。英名ウィーピング・ラブグラスの方が通りがよいでしょうか。「バカにするな」という向きもあるほどよく見かける植物です。夏から秋、さらには冬にかけて、花序が弓型にしなだれる姿は特徴的で、遠くからでも容易に識別できます。

しかし、この植物にも問題がありそうなのです。以前、相模川や中津川の河辺植生を調査した際、この植物があたり一面に生えており、「こんな所にも野生化しているんだな」と思いながら、植生調査したことがありました。しかし、その標本をよく見てみると、

ちょっと様子が違うようなのです。一番異なるのは花序の枝と花軸との分岐点に生える白毛です。シナダレスズメガヤには白毛が束生していますが、その標本には全くありませんでした。その際には、時間的な制約もあり、取り敢えずシナダレスズメガヤとして、報告してしまいました(田中,1994)。その後、いろいろ調べてみたところ、その周辺の河原には、白毛のないものが圧倒的に多いようなのです。

その後、県立博物館所蔵の『神奈川県植物誌1988』の標本を調べたところ、やはり、シナダレスズメガヤとされている標本には、すべて白毛がありました。しかし、その河原のものと同じものと思われる植物も、亡くられた森氏により認識されており、疑問種としてシナダレスズメガヤの束からはじかれていました。

この河原に生えているシナダレスズメガヤ“もどき”は一体何なのでしょう。ただ毛がないだけの単なる変異なのか、どこかで報告されている新しい帰化植物なのか、はたまた日本新産の帰化植物なのか、今のところ調べはついていません。今後、よく調べてみようとも思いますが、いったいどれぐらい広がっているものなのか、会員の皆さんも気を付けて観察してみてください。

ヌマツルギクの県内発見の事情

(奥津 均)

1994年12月下旬、鎌倉市深沢の石垣に開花中の見慣れぬ植物群落を見つけました。一見したところ、アメリカセンダングサを小型にして地面に伏せたような感じで、つるをひき地に接した茎は不定根を多数出し、舌状花は黄色で7~10枚位で不ぞろいに出て、花柄は各節より単生し割合にきれいです。

自宅へ戻り *Bidens* のつもりで図鑑を調べたがわからず、浅井康宏先生へ標本と写真を送りお伺いしたらすぐ御返事を頂きまして、「ヌマツルギク *Spilanthes americana* (Mutis)

Hieron. で1961年に福岡市の河岸の湿地でみづかり、本州では初めてでしょう。つきましては鎌倉へ入った経路を土地の持主から聞いて調べてください。」とありました。

さっそく、持主に会いその人の叔母が鎌倉市大町に住みその庭からもらったとのこと、私が直接その家に出向き事情を聞きました。そして次の経緯が判明しました。すなわち、千葉大の花卉園芸学の担当の浅山英一先生が、メキシコ旅行をされたとき、採集した植物を学部の生徒さんへおみやげとして「メキシコギク」として配ったもので、生徒さんから各地へひろがり、鎌倉へ巡って来たようでした。

話は以上ですが、裏付けは必要です。私は直接浅山先生へ手紙を出してメキシコギクについてのいきさつなどを尋ねましたところ、すぐ次のような御返事を下さいました。「この植物は、スピランテス・アメリカーナで、今より約15年前、65歳で定年退職した後、メキシコ旅行をした折、アカプルコの道ばたで植物を採集し日本へ帰って皆さんに配り、その後、茅ヶ崎で園芸教室を開いたときも参加者に配りました。現在も育てている人は多いと思うが、松戸の自宅の庭では枯らしてしまっただけです。」とのお話でした。

浅山先生は、千葉県をはじめとして神奈川県多くの場所で種子を配られたようで、これからも逸出した報告があると思います。この原稿を書いているときも勝山輝男氏より電話を頂き、「調査会会員の山田文雄氏が1993年12月に横浜市山下埠頭にて採集された標本が県立博物館の収蔵庫に入っている」旨、御教示がありました。ここに標本を提出して報告します。

アキザキヤツシロランとの出会い

(藤野知弘)

1994年11月27日、座間市緑ヶ丘にある我家の横のモウソウの竹林にアキザキヤツシロ

ランを見つけました。5本の茎にそれぞれ2～3本の花柄を20～40cmに直立させ、その先の子房は6裂して膨らみ、内側には純白の綿毛状のものが付着していました。堅くて丈夫な茎は5～15cmで、暗褐色で小さい黒い鱗片状の葉を、下部はまばらに、上部ではつまって互生させ、上部2～3節から花柄が伸びていました。花柄は薄茶色で、つるつるとして光沢があり、つまむと中空であることがわかりました。子房の先端近くには原形のわからない黒いものが残り、花卉の枯死したもののようです。すでに、数本はしおれて倒れていました。

FLORA KANAGAWA No. 38でラン科レポートを見ていましたので、当たりをつけて図鑑中からあれこれ検索するうちに「花後、花柄が徒長する」という説明からヤツシロランにたどり着くまでは、心が騒ぐのを覚えました。神奈川県植物誌に、この地区での記録がないので木場さんに勧められてペンを取りました。

茎を引いたら、10cm弱のごつごつとした塊根が出てきましたが、来秋には花を記録したいので埋め戻し、地上部だけを標本にして県立博物館に収めました。

こんな街中の、こんな小さな竹林にどうやってやってきたのか不思議です。きっと、昨年もここにひっそりと花を咲かせていたのだらうと思いますが・・・。

神奈川県植物誌調査会

1995年度総会報告 (事務局)

去る5月13日(土)、小田原市入生田に移転した県立博物館で1995年の総会が開かれました。1994年度の事業報告と決算報告がなされ、続いて1995年度の事業計画と予算案を審議し可決されました。総会後は博物館の展示室と収蔵庫、研究室を見学しました。

◇1994年度事業報告

- 1994.4.10 1994年度総会(平塚市博物館)
- 1994.6.11 野外調査研究会(西丹沢西沢～畦ヶ丸・権現山)
- 1994.8.10 フロラカナガワ 38号発行
- 1994.11.20 初山泰一先生卒寿記念論文集の刊行
- 1994.12.3 初山泰一先生卒寿記念論文集刊行・『神奈川県植物誌1988』完売祝賀会
- 1994.12.24 フロラカナガワ 39号発行
 - ・植物誌の頒布終了(8月末)
 - ・丹沢大山自然環境調査(植物相)への協力(継続)
 - ・神奈川県版レッドデータブック作成への協力
 - ・神奈川県立博物館の情報システムへの協力

表等を開催)

野外研究会

1) 小田原石垣山方面 担当: 高橋秀男

2) 丹沢方面 担当: 城川四郎・秋山守

『笏山泰一先生卒寿記念論文集』の販売

『神奈川県レッドデータ生物調査報告書』の
販売

丹沢大山自然環境調査(植物相)への協力

(継続)

神奈川県立博物館の情報システムへの協力

(継続)

◇ 1995年度 運営体制

顧問 笏山泰一

代表 城川四郎

運営委員 秋山 守, 内田藤吉, 大場達之,
大森雄治, 小崎昭則, 小原 敬,
笠原基知治, 北川淑子, 小林純子,
鈴木一喜, 諏訪哲夫, 高橋秀男,
西山清治, 根本 平, 長谷川義人,
浜口哲一, 早川亮太, 守矢淳一,
村上司郎, 山本 明

事務局 勝山輝男, 木場英久, 田中徳久

◇ 1995年度 事業計画

フロラカナガワの発行

(年2回, 6月・12月頃を予定)

『神奈川県植物誌1988』改訂の検討・調査

- 1) 改訂作業のための検討会(運営委員会
を開催し検討)
- 2) 補充調査の実施(県立生命の星・地球
博物館の情報システムを活用)
- 3) 改訂へ向けての発会式の開催(記者発